



Title	満洲語文語の従属節属格主語の機能について
Author(s)	山崎, 雅人
Citation	北方言語研究, 8, 127-146
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68734
Type	departmental bulletin paper
File Information	08yamazaki.pdf



満洲語文語の従属節属格主語の機能について¹

山 崎 雅 人
(大阪市立大学)

1. はじめに

以下の例 (1)~(4)が示す通り、モンゴル語と同じように²、満洲語文語にも主節主語に主格形を³、従属節主語には属格主語を取る構文がある⁴。久保 (1981)は、この現象を扱ったものの先駆けであるが、そこでは檔案の例に基づいて、従属節主語にゼロ助詞、属格助詞、対格助詞を用いる場合の統語的条件を述べている。また、早田 (2013: 176)は『満文三国志』から、連体節の動詞の目的語が主語に先行する連体節主語の三例を提示し、早田 (2015: 11-12)は属格主語—目的語の順の例も追加して、それらの統語的特徴を論じている。本稿は、従属節主語に属格名詞を取る例を他の格の例と比較して、これらの先行研究が論じていない、当該形式の機能的な面をより多様な事例に基づいて分析する。

- (1) wang-po hendume, sakda beye bi, niyangdz-i ambula omire be

王 婆 述べる あたしは(主) 奥 様が(属) おおいに飲むことを
sambi,, 第3回 20a2-3⁵
知っている

- (2) holkonde jang-no-i dosika be sabufi, gaihari urgunjecibe, 第5巻 14a6-7

だしぬけに張 訥が(属)入ったを見て 突如嬉しさがこみあげてきたとは言え

- (3) bi inu terei hūsun be ise bu sere bithe alibufi, hiyan-i hafan-i adarama

俺(主)も 奴の雇人 を 打ち懲らせという書 呈して 知 事 が(属) どう
gamara be tuwa,, 第2巻 33b1-2
処分するかを見てやる⁶

¹ 本稿は、日本言語学会第154回大会(2017年6月24日 首都大学東京)の口頭発表に基づく。本稿の掲載にあたり、二名の匿名査読者からの有益な指示により改稿できたことを感謝します。また、論文掲載の決定を下された編集者にも感謝します。本稿の責任はすべて著者が負うものです。

² モンゴル語の属格主語は、包麗娜(2014: 2)に記述があり、久保(1981: 50)にもその言及がある。

³ 満洲語文語は日本語に近い語順を有することから、例文には対訳語をつける。主節の主格主語には(主)と、従属節主語には(主)(属)(対)のように格名を表す記号を付ける。満洲語文語の助詞のうち、主格はゼロ形態で、属格は-iで対格はbeで表記される。他に、与格de、奪格ci、具格-iなどの助詞がある。属格助詞は所属などを表し日本語の「の」に相当するが、従属節主語の時は訳語を「が」とする。対格助詞も同様に「を」に相当するが、従属節主語の場合は「が」と訳す。なお、属格助詞にハイフンをつけるのは、早田(1998)の表記法に従い助詞以外の同形表記と区別するためである。カンマ表記は、原文で記号がひとつだけか、ふたつ用いられているかに基づく。一部に不統一があるが、前者は日本語の読点に、後者は同じく句点に近い機能と考える。なお、使用したテキストには一部印字が不明瞭な箇所があるが、前後の文脈から推測できるものは、そのように注で述べる。

⁴ 属格名詞が行為者でそれに続く動詞が述語になる形式は、Gorelova(2002: 400)に言及がある。

⁵ 『満文金瓶梅』(1708年序)からの例は第~回と、『擇繙聊齋志異』(1848年序)からの例は第~巻と表記する。

⁶ 満訳文は動詞語幹のみの形態で、これは通常は命令形に用いられる。ただし、『擇繙聊齋志異』中の傍らの漢文には「我亦呈治其備 視彼将何處分」とあり、主節主語は「我」で、その述語は動詞「視」なの

- (4) lio-ts'ang-ke tuwaci, ulgiyan emke fulu tucikebi,, **lio-hai-ši -i** injere be
 劉 滄 客 見ると 豚が(主) 一頭余分になっていた 劉 海 石が(属)笑うのを
 donjifi, uthai deduheī gelhen akū majige aššarakū, 第 16 卷 30a6-7
 聞いてそのまま伏せていて 敢えて 少しも 動かない

2. 従属節主語の三タイプ

主節と従属節がそれぞれ主語と述語を備えた構文は、典型的には埋め込み文を持つ「AはBがCすることをDする」という形式となる。Aが主節主語で、Bが従属節の主語、Cがその述語で、Dが主節述語である。上記の例 (1) のようにこの四要素が全て揃うことも、同じく例 (2) のようにAが非言及の例もある。本稿では、Bが取る格が主格、属格そして対格の例を扱う。

本稿の主張は、主格の時は意味的に中立であるが、属格の時は当該発話の話し手の主たる意図が「Cする」と言う部分を伝えることにあること、これに対して対格の時はそれが「B」にあるということである。言い換えれば、その発話の焦点が、誰がしたかにある場合はその行為者名詞に対格助詞をつけ、何をしたのかにある場合はそれに属格助詞をつけると言うことである。なお、本稿で「焦点」と言う時は、「発話または文の発信者が受信者に最も伝えたい情報」と定義する。

こうした機能の差異を明示するために、以下では次の仮説を実例に基づき検証する。

「従属節主語に属格を用いた場合は、その前後の文脈において、従属節述部に述べられている行動に関する言及があり、対格を用いた場合は、同じく従属節主語の人物についての言及があり、主格を用いた場合はそのどちらにも該当しない」

最初に見る以下の三例は、主節主語を除く三要素が同じである対照的な用例で、いずれも従属節主語は **si-men-king** 《西門慶》、その述語は **jihe** 《来た》、主節述語は **donji-** 《聞く》である。

- (5a) holkonde julergi duka toksime, **si-men-king** boode jihe seme donjire jakade,
 突然 表 門 たたいて西 門 慶が(主) 家に来たと言う聞いた ので
 pan-gin-liyan, li-ping-el teni meni meni boode genehe,, 第 51 回 47a9-b2
 潘 金 蓮 李 瓶 児は(主)ようやく各 各の部屋に行った

この発話の前後に西門慶の帰宅に関連することへの言及はなく、主格主語が用いられるのは、この発話の文脈ではこの情報を聞いた潘金蓮と李瓶児にとって西門慶がしたことが特別な出来事として取り上げられているのではないと理解される。このように、当該発話の前後の記述に従属節で述べられている出来事に関連づけられることが書かれていない場合、その発話を含む文脈に対して無標の情報を表すと考える。

で、これに命令形をあてるのは正確な翻訳とは言えない。この日本語訳は漢文の意味からあてる。

- (5b) u-yuwei-niyang ni jergi geren niyalma, **si-men-king ni** jihe be donjifi, gemu
 吳 月 娘 た ち 人(主)西 門 慶 が(属)来たことを聞いて 皆
 amargi boode genehe,, 第 19 回 10a2-4…sini uttu erde jidere be
 奥の 部屋へ行った あなたが(属)こんなに早く来るとは
 sarkū,, 第 19 回 10b1
 知らず

後の発言から、この時の西門慶の帰宅は予測されていなかったことが分かる。場所は自宅なので本人が現れることは何ら不自然ではないが、思いがけなく早い帰宅であることが言及されている。このように、誰がしたというよりも起こったある出来事へ読み手の注意を引く記述にする場合、その行為を行う者に属格助詞をつけることでそれに続く従属節述語を焦点として表現する機能を有するもので、この例の **jihe** 《来た》は、上で見た無標の場合とは対照的で、文脈に対して有標の情報である。

- (5c) ineku mini sakda beye genefi honto ho erin ohakū da-guwan-zin be gajiha kai,
 やはり あたしが 行って 半 時 足らずで大 官 人 を連れて来たぞよ
 pan-gin-liyan, **si-men-king be** jihe seme donjifi, uthai abka ci
 潘 金 蓮は(主)西 門 慶 が(対)来た と 聞いてすなわち (西門慶が) 天から
 tuheke adali urgunjeme tucifi okdoko, 第 8 回 11a5-8
 降って来たように喜んで 出 迎えた

先行する発言から、王婆は期待されて潘金蓮宅へやって来た西門慶その人のことを、聞き手の潘金蓮に特に訴える意図があることが分かる。ここは従属節主語として対格助詞 **be** がつけられた **si-men-king** が、誰について語っているかという、この発話の対象者であり、その焦点と見なすことができると考える。すなわち、従属節の対格主語はその発話の焦点を導入する機能を持つという意味で、これも文脈に対しては特定の部分を有標とする形式になっていると考える⁷。

以下の三例は、従属節主語が二人称単数代名詞である。

- (6a) tacibume hendume fusihūn beye agu **si** yekengge haha ojoro be safi,
 示唆して 述べる 僕は(主) 大兄あなたが(主)男らしい 人であると知って
 dolo dembei hungkereme dahaha, 第 4 巻 54b3-5
 内心誠に 私淑した

⁷ 本稿の用例の出典である『満文金瓶梅』『擇繡聊齋志異』より早い、十七世紀前期の満文文献『満文原檔』『満文三国志』における対格主語について、早田(2011: 9)は「従属節の対格主語は、主節の主格主語（や不定格主語）とは別のものを指す。これこそが対格主語の中心的機能に他ならないと思われる」と述べる。なお、対格主語は従属節述語動詞の主語であるとともに、主節述語動詞の目的語でもあるため、焦点となりやすいと考える。属格主語にはそうした統語的二重性はない。また、その機能については、山崎(2015)を参照。

(6b) sini weile endebuku umasi labdu, jalgan ton wajici acacibe, **sini** halafi aliyaha be
 お前の罪 過 大層 多く 命 数尽くべきだがお前が(属)改めて悔いたのを
 gūnime, tuttu damu gashan wasibufi, majige isebure be
 酌みそのようにただ 災い 降らせていささか懲らしめようとのことを
 tuwabuhabi, 第20巻 19a5-7
 見せしめとした

主格主語 **si** を用いている例 (6a) では、話し手が聞き手に対して高い評価を述べているだけであり前後の文脈に関連する言及がないのに対し、(6b) では属格主語 **sini** に続く述語部分 **halafi aliyaha** 《改めて悔いた》という行為は、その前の部分で言及されている、本来命を奪われても至当であるような大罪を犯した者に対して、後続部分で述べている、罪一等を減じる情状酌量とする理由として言及されているものであり、ここで話し手が強調したい情報、すなわち発話の焦点であると考えられる。

(6c) šeng-yūn-miyan daci sargan jui de banjire sain bihe,, sargan jui urgunjefi, imbe
 盛 雲 眠は 元から女 子 と付き合いがよかった女 子 喜んで 彼女を
 solifi emu jahūdai de tebufi, ishunde bakcilame cibsime nasahabi, aibide genembi
 招いてひとつの舟 に乗せて互いに 相対して思い嘆いて悲しんだどこへ 行くの
 seme fonjiha de, šeng-yūn-miyan hendume, tatašara gūnin hing seme bihei, goro baci
 と 聞いた 時 盛 雲 眠は 述べる 引きつける気 専らで いたまま遠い所から
 ki-ho-guwan de isinaci, **simbe** king halai nakcu de nikenehe seme
 棲 鶴 観 に出かけて行ったらあなたが(対) 京 氏の 舅 に世話になったと
 donjifi, tuttu ederi hūwang-g'ang ni bade genefi, emgeri fujurulame tuwanaki
 聞いてあのように黄 岡 の所に行って一度 問いただしてみたかった
 sembi, 第7巻 52b3-53a4
 と言う

上の例は、発言者の盛雲眠が、かつて親密であったがその後別れた聞き手の **sargan jui** 《女子》と川の船上で遭遇した場面での発話である。従属節主語の対格主語 **simbe** に先行する部分で、“tatašara gūnin hing seme bihei, goro baci ki-ho-guwan de isinaci” 《(あなたのことを)ずっと気に懸けていたので、遠方より棲鶴観に出かけて行ったところ》⁸と述べていて、遠くから会いに出かけるほど盛雲眠は聞き手のことを気に懸けていたという心情を直接本人に吐露する物言いであることから、二人称代名詞対格形 **simbe** で言及している聞き手がこの発話の焦点と考える。

以下は主節述語に **alambi** 《告げる》が現れる例である。

⁸ 原漢文「久切懸念 遠至棲鶴観」《長く切に心に懸けていて遠くより棲鶴観に至った》

- (7) hehe cūn-mei de fonjime amala aiseme daišambihe,, cūn-mei, **cio-gioi -i** dobori
 女 春 梅 に 尋ねて 奥で何ゆえ騒いでいたか春梅は(主) 秋 菊が(属)夜中
 uce neihe emu baita be giyan giyan -i alaha manggi,, hehe cio-gioi be tantaki⁹ seme
 戸 開けた一 件 を あれ これ と告げた 後 女 秋 菊 を叩こう と
 seyehe,, 第 83 回 17b9-18a2
 恨んだ

この例に先行するところでは、小用のため庭に出た秋菊が別室の潘金蓮らの濡れ場をのぞき見る場面が描かれている。例 (7) は、その退室時のことを春梅が秋菊と話しているところを潘金蓮にとがめられた時の発言である。潘金蓮は女たちが騒がしく言い合う様子を耳にして、その原因を尋ねているので、春梅の発言の焦点は、誰がしたかよりも、属格名詞に続く従属節述部が告げる、何が起きたかを問われたことへの返答にあると考える。小女の分際で勝手に鍵を開けて部屋の外に出るという、予期しない行為をしたことに腹を立てて、女主人の潘金蓮は秋菊を叩こうとするわけである。

これに対して、対格名詞を従属節主語とする例は以下の通りである。

- (8) sini looye fonjime ohode, si damu **membe** sujuhe seme
 お前の旦那 尋ねた 時に お前は(主)ただ 俺たちは(対)走って行つたと
 ala sehe,, 第 42 回 19b7
 告げろと言った

この前には以下の文がある。

- (9) ing-be-jiyo terei šan -i jakade šušunggiyame hendume, beliyen jui bi neneme
 応 伯 爵 その 耳の 所で 耳打ちして 述べるに 間抜けめ俺はさつき
 tuttu henduhekūn, bi aikabade aššarakū oci, gūwa inu tehei bisire
 こうと言ったじゃないか俺がもし 出て行かなければ 他人も 座っている
 be dahame jaci yoto akūn, 第 42 回 19b4-6
 以上は さらに愚かでなかろうか

さらに、後には以下の文がある。

- (10) dai-an hendume, ing-el-ye siyei-ye -i emgi gemu genehe,, 第 42 回 19b9-20a1
 玳 安 述べる 応二 爺 謝 爺 と一緒に皆 行つた

こうした文脈を考慮すると、例 (8) では誰がすでにいないのかを焦点として聞き手に記憶させる発話と考える。それが、例 (9) で発話者の応伯爵が言い含めようとしている彼ら

⁹ tandaki に見えるが、意味から tantaki と考える。

自身のことで、それを追隨して再言及しているのが、例 (10) の発話「応二様は謝様と連れ立って皆様方行かれました」である。

- (11) u-yuwei-niyang, **li-ping-el -i** tuheke babe alara jakade, si-men-king ekšeme
呉 月 娘は(主)李 瓶 児が(属)倒れたことを告げるので 西 門 慶 あわてて
juleri genefi tuwaci, li-ping-el nagan de deduhebi, 第 61 回 28b7-9
表に行って見れば李 瓶 児 炕の上で臥せっていた

この例の後にある以下の部分は、属格主語の後の述語部分が記す昏倒の様子を李瓶児自身が詳細に述べている。上の例は属格の主語を用いることで、それに続く部分を焦点とする発言と考える。

- (12) ainaha be sarkū, fejergi ci uthai sitere adali wasikai yasa -i juleri
どうしてだか 下 からまさに尿が出るみたいに下したまま目 の 前
luk seme farhūn oho, ilifi hūsihan hūwaitara de, abka šurdere na forhošoro
クラッと暗くなった立って裾の紐を 結ぼうと 天 回り 地 返った
adali uthai tuhenche,, 第 61 回 29a3-5
ようにそのまま倒れた
- (13) tere nergin de juwe coohai niyalma ibefi, emke dzandz be šumhun de etubufi
その 折 にふたり兵 士 進んでひとつ指責め具を 指頭 に 着けさせて
emdubei tataa jakade, ping-an fintame nimere de hamirakū sureme hendume,
しきりに引く ので 平 安痛くてたまらずに耐えられず叫んで述べる
buya niyalma bi yargiyan -i **looye be** boode akū seme alaha bihe, 第 35 回 15b1-4
私は(主) 本当 に旦那様は(対) 家にいないと 告げていた

この前に以下の部分がある。

- (14) si-men-king hendume, bi duka be dosime jaka, uthai sini baru yaya niyalma jici,
西 門 慶 述べる 俺が門 を 入る と すぐ お前にどんな 人 来ても
damu boode akū seme jabu seme afabuha kai, si ainu donjirakū,, ping-an hendume,
ただ 家にいないと答えろと言いつけたぞお前はなぜ聞かないのか 平 安 述べる
be-ecike -i jihe fonde, buye niyalma bi **looye be** dukai tule antaha fudeneme genehe,
白 大 が(属)来た時に 私は(主) 旦那様は(対) 門の外へ 客 見送りに行って
jidere unde seme alaci, i umai akdarakū murime dosika¹⁰, 第 35 回 14b5-9
まだ帰らないと告げたのにあの方は 聞き入れず 無理に入ってきた

この発言した平安は、初めに詰問され次いで拷問される中で身の潔白を主張する場面に

¹⁰ この語は、dos までは明瞭だがその後は墨のため文字が読めなくなっている。ここでは、意味からこのように判断する。

おり、例 (13) は「主人は家にいないこと」を、例 (14) では「主人は客を見送りに出かけて戻っていないこと」を、繰り返して「主人」を対格主語 *looyebe* にすることで、誰のことを述べているかという発話の焦点を明示することにより、己を弁護する目的の発話となっていると考える。

ここまでの例から分かることは、形式面では、従属節主語が対格のときは主節述語の前に *seme*¹¹《～と（言って）》という補文標識が置かれ、属格のときは主節述語には *be*《～を》という対格助詞が用いられ、主格のときは *seme* も *be* も共に取りうることである。

次の例は複雑な構造を持つ。主節の「*jang-el-guwan*（張二官が）～*be donjifi*（を聞いて）」の下に、ひとつめの従属節「*li-giyoo-el -i*（李嬌児が）～*seme alara*（と告げる）」があり、さらにその下にもうひとつの従属節「*pan-gin-liyan be*（潘金蓮は）～*wafi*（を殺し）」とそれ以下母子の死までの悪事の数々を述べた部分を挟んでいる。一文が長いと、主節主語はその述語に近いところ、すなわち文の終わり近くになってようやく言及される。

属格主語の李嬌児は従属節の主語であり、その述部は発話者がこの発話全体で語ろうとする焦点である潘金蓮の悪事を縷々述べる部分である。以下の引用に先立つ文脈には、潘金蓮の過去の罪状をまず春鴻が告げる箇所があるために、それを受けて *geli*《また・さらに》で始まるのである。

そこに含まれる対格主語の潘金蓮は、この発話のもうひとつの焦点として非難の対象になっており、引用箇所の直前で張二官自身が *ere gese hehe be boode gajifi ainambi*《あんな女を家に連れてきてどうする》と述べていることから、当該文脈がこの女について話す場面であることが分かる。

従属節に属格主語をとる場合の主節述語 *donjifi* は対格助詞 *be* をとること、一番下の節の対格主語に対しては、その上の従属節述語 *alara* が補文標識 *seme* をとっていることは原則通りである。

(15) *geli li-giyoo-el -i pan-gin-liyan be seibeni eigen be oktolome wafi, si-men-king*

さらに李 嬌 児 が(属)潘 金 蓮は(対) 昔 夫 を薬を盛って殺し西 門 慶
gaifi gajifi, geli booi haha jui de latuha, ningguci sargan -i eme jui tede nungnebuft,
 連れ込んでさらに家の 男 子 と 通 じ 六 奥 様 の 母 子あ の 女 に 迫 害 され て
bucehe seme alara be donjifi jang-el-guwan uthai gajjara be nakaha,, 第 87 回 6a3-7
 死 ん だ と 告 げ る を 聞 い て 張 二 官 は (主) す な わ ち 受 け 入 れ る の を 止 め た

上記の例を主節と従属節の各レベルの主語と述語ごとに組にして分類すると、以下の通りになる。

li-giyoo-el -i 【従・主 2[属]】…*seme alara* 【従・述 2】
 李 嬌 児 と 告 げ る

¹¹ 動詞 *sembi*《(～と) 言う》の副動詞形で、引用言や補文節を導入する。

- pan-gin-liyan be 【従・主 3[対]】 …oktolome wafi 【従・述 3-1】 …si-men-king gaifi
 潘 金 蓮 葉を盛って殺し 西 門 慶 連れ
 gajifi, geli booi haha jui de latuha 【従・述 3-2】
 込んでさらに家の男 子 と 通じ
 ningguci sargan -i eme jui 【従・主 4】 tede nungnebufi, bucehe 【従・述 4】
 六 奥様 の 母 子 あの女に迫害されて 死んだ
 be donjifi 【主・述 1】 jang-el-guwan 【主・主 1】 gaijara be nakaha,,
 を聞いて 張 二 官 受け入れるのを止めた
- (16) emu inenggi siowei-soo-el -i 【従・主 2】 pan-gin-liyan be 【従・主 3】 tucibufi
 ある 日 薛 嫂が(属) 潘 金 蓮は(対) 追い出されて
 wang-po -i boode uncame bi 【従・述 3】 seme alara 【従・述 2】 be donjifi 【主・述 1】 ,
 王 婆 の 所で売っている と告げる を聞いて
 cūn-mei 【主・主 1】 yamji šeobei -i baru songgome fame hendume, 第 87 回 6b9-7a2
 春 梅は(主) 晩 守備 に向かい泣いて喉を哽らして述べる

これも前の例 (15) と同じ形式、すなわち主節主語が後続し、ふたつの従属節を持つ構文である。まず、属格主語の薛嫂に続く部分で潘金蓮の悲惨な境遇が書かれ、それを受けて春梅がおおいに泣くまでに至ったことが述べられている。春梅の号泣の原因として潘金蓮の現状に発話の焦点があると考え。そして、最も内側の従属節は対格主語を持ち、それは悲惨な境遇に落ちた潘金蓮その人を指し、もうひとつの焦点であると考え。この引用箇所続く春梅の発言では、潘金蓮のことを弁護する文言が守備に対して滔滔と述べられるのである。

- (17) fusihūn -i niyamangga niyalma lung-hi 【主・主 1】 , kemuni wesihun erdemu be maktame,
 我が 親戚の 者 龍 溪は(主) かねがね ご 人徳 を 称えて
 agu -i 【従・主 2】 aisilame wehiyeme, emu mujilen -i baita icihiyara 【従・述 2】 de
 大兄が(属) なにかと援助して 一 心 を以って事に当たっていること に
 akdahabi 【従・述 1】 seme hendumbihe 【主・述 1】 ,, yala jiramin guculehe
 頼っていた と 述べていた 誠に 厚く友誼を結んだ
 seci ombikai,, 第 70 回 10b7-9
 と言うべきよ

この例では、属格主語の後の aisilame wehiyeme, emu mujilen -i baita icihiyara 《あれこれと援助し専心して仕事をしている》と言う部分が、agu 《(聞き手を指す) 大兄》への称賛の根拠となっており、ここに対応して、すぐ後で yala jiramin guculehe seci ombikai 《誠にありがとうございます》と感謝の文言を述べていることから、発話の焦点であることが分かる。

これは、主節の主語「龍溪が」と述語「～と申ししていた」が従属節をはさむことで距離が遠く、その点は前の例 (15)(16) とは異なる。主節の主語と述語がふたつの従属節をはさんでおり、外側の従属節の主語(動詞 akdahabi の動作主)は主節と同じ人になるので空主

語である。なお、属格主語は通常は対格助詞 **be** を取るが、**akdambi** 《～に頼る》は与格助詞 **de** を取る。

3 主節述語による分類

従属節に属格主語を用いる場合の主節述語には、さまざまな動詞が用いられる。筆者は、属格名詞を主語とする構文の従属節が伝える情報に対して、主節主語となる行為者がどのように接するかにより、以下の三種類に分かれると考える。すなわち、**donjimbi** 《聞く》、**sabumbi** 《見かける》、**tuwambi** 《見る》などの受信型知覚動詞及び **gūnimbi** 《思う・考える》、**sambi** 《知る》、**ulhimbi** 《理解する》などの心理・思考動詞と、**alambi** 《告げる》、**fonjimbi** 《尋ねる》、**gisurembi** 《語る》、**jon(d)ombi** 《繰り返し言及する》などの発信型発話動詞である。

これらは、従属節が形成する主述構造の中の述語部分を、主節主語に立つ者が主要な伝達情報として受け取ることや自己の意識のうちで処理することあるいは他者に向かって発信することを表現する構文であると考ええる。

○受信型知覚動詞

◎alimbi 《受ける・受け止める・認める》

(18) **si-men-king ebuhu sabuhū beye mehume doro arafi hendume, fusihūn hafan, amba**

西 門 慶 あわてて 身かがめてお辞儀して 述べる 小 官 大

niyalma -i gosime tacibuha be alifi 第 65 回 33b1-2

人 が(属)愛顧して教えた を 承り

◎donjimbi 《聞く》

(19) **tereci meng-ioi-leo, pan-gin-liyan -i yertecun tuwaha be donjifi**, 第 12 回 22a3-4

それから孟 玉 楼は(主)潘 金 蓮 が(属)辱しめ見たことを聞いて

(20)=(5b)) **u-yuwei-niyang ni jergi geren niyalma, si-men-king ni jihe be donjifi, gemu**

呉 月 娘 た ち 人は(主)西 門 慶が(属)来たことを聞いて 皆

amargi boode genehe,, 第 19 回 10a2-4 … **sini uttu erde jidere be sarkū,,** 第 19 回 10b1

奥の 部屋へ行った あなたがこんなに早く来るとは知らず

◎sabumbi 《見かける・目にする》

(21)=(2)) **holkonde jang-no -i dosika be sabufi, gaihari urgunjecibe**, 第 5 卷 14a6-7

だしぬけに 張 訥が(属)入ったを見て 突如嬉しさがこみあげてきたとはいえ

(22) **fu-in hafan hū-ši-wen, dergi hafan -i pilefi unggihe be sabufi** 第 48 回 5b6

府 尹 官 胡 師文は(主)東 官 が(属)書いて送ったを 見ると

◎tuwambi 《(意図的に) 見る》

(23)=(3)) **bi inu terei hūsun be isebu sere bithe alibufi, hiyan -i hafan -i adarame**

俺(主)も 奴の雇人 を 打ち懲らせという書 呈して 知 事が(属) どう

gamara be **tuwa**., 第2巻 33b1-2

処分するかを見てやる

(24) wang-po hendume, sakda beye bi inu **niyangdz -i** weilere be **tuwaki**

王 婆 述べる 老 身私は(主)また 娘さんが(属)仕事をするのを見たい

sembi., 第3回 11a2-3

と言う

○心理・思考動詞

◎aliyambi 《待つ》

(25) si-men-king soktoho seme 第13回 13a2 … damu **li-ping-el -i** solinjire be

西門 慶は酔ったと言って

ただ李 瓶 児が(属)呼びに来るのを

aliyambi, 第13回 13a4

待ち構える

(26) ilan gudz jamarara be sabufi, **ajige gudz -i** efen jeme wajire be **aliyafi**, hose be

三 尼は口論するのを見て 小 尼が(属)餅食べ終わるのを待って 箱 を

uhufi, 第75回 40a1-2

包んで

◎baimbi 《求める》

(27) ere ser sere yadara gūnin okini., **amba niyalma -i** injeme gaijara be

これは 微意ならんと ありたく 大 人には(属) ご笑納 を

baimbi., 第35回 25a9-b1

願います

(28) **wesihun -i** tuwara be **baimbi**., 第66回 10a1

上様が(属)ご覧になることを求めます

◎gūnimbi 《思う・考える》

(29) ing-be-jiyo **tere juwe nofi -i** mejige angga aljaha babe **gūnime**, ere ildun de

応 伯爵は(主)彼ら ふたりが(属) 便り 応じた ことを 思い この機会 に

tese de gaire de 第43回 3a7-8

彼らに求めようと

(30=(6b)) sini weile endebuku umasi labdu, jalgan ton wajici acacibe, **sini** halafi

お前の罪 過 大層 多く 命 数尽くべきだがお前が(属)改めて

aliyaha be **gūnime**, tuttu damu gashan wasibufi, majige isebure be

悔いたのを 酌みそのようにただ 災い 降らせていささか懲らしめようとのことを

tuwabuhabi, 第20巻 19a5-7

見せしめとした

◎ sambi 《知る》

(31)=(1) wang-po hendume, sakda beye bi, **niyangdz -i** ambula omire be
王 婆 述べる あたしは(主) 奥様 が(属)おおいに飲むことを
sambi,, 第 3 回 20a2-3
知っている

(32) tere jang-loo beye mehufi giogin arame dorolofi hendume, ajige hūwašan
その長 老 身かがめて合掌して お辞儀して述べる 拙 僧は(主)
ajige nainai -i jidere be **sarkū**,, 第 89 回 17a8-9
奥 様が(属)来ることを知らない

◎ulhimbi 《理解する》

(33) šu-tung hendume, **ejen -i** tacibuha be buya niyalma **ulhihe** sefi 第 34 回 24a8-9
書 童 述べる 旦那が(属)教えたことを 小人私は(主)分かりました と言って

(34) si-men-king de fonjime teni si, ing halangga boode nure omire de,
西 門 慶 に 尋ねて今しがたあなたが応 氏 家で 酒 飲んで
dai-an -i helnehe be, yaka niyalma **ulhiheo**,, 第 16 回 23b4-5
玳 安が(属)迎えに行ったことを 誰か人が(主)気づいたか

○発信型発話動詞

◎alambi 《告げる》

(35)=(7) cūn-mei, **cio-gioi -i** dobori uce neihe emu baita be giyan giyan -i **alaha**
春梅は(主) 秋菊が(属)夜中 戸 開けた一 件 を あれ これ と告げた
manggi,, 第 83 回 17b9-18a1
後

(36)=(11) u-yuwei-niyang, **li-ping-el -i** tuheke babe **alara** jakade, si-men-king
呉 月 娘は(主) 李 瓶児が(属)倒れたことを告げるので 西 門 慶
ekšeme juleri genefi tuwaci, li-ping-el nagan de deduhebi, 第 61 回 28b7-9
あわてて表に行ってみれば李 瓶 児 炕の上で臥せていた

◎fonjimbi 《尋ねる》

(37) buya niyalma bi, yang-jeo bai miyoo-yuwan-wai -i takūraha niyalma, bithe
小 人私は揚 州 場の 苗 員 外の遣わした 人(主) 書
unggime looye -i elhe be **fonjime** jihe sefi, 第 55 回 29b3-5
送って旦那は(属)平穩かを尋ねて来たと言って

(38) cūn-mei gege hacihiyame amargi boode dosimbufi, cai efēn ulebuhe,, **jui -i** sain,
春 梅姐は(主)酒食を勧め奥 部屋へ 招いて 茶 菓もてなした子は(属)元気が
booi banjire were be emu jergi **fonjifi**, 第 95 回 32b6-8
家の暮らしはどうかを 一 度 尋ねて

◎gisurembi 《語る》

(39) **pan-gin-liyan -i** emhun deduhe be **gisurerakū**, si-men-king, li- ping-el -i emgi

潘 金 蓮が(属)ひとりで休んだことは 言わず 西 門 慶 李 瓶児と共に
ishunde buyeme gosime nure omime gisureme dobon dulin oho manggi, 第 20 回 6b4-6
互いに 慈しみ愛して 酒 飲み 語って 夜 半 なった後

(40) si-men-king, fejile boihojilame tehe,, uculere **jilgan -i** faksi icangga, maksire

西門 慶 下に主人となって座った 歌う 声は(属)美しく香しく 舞う
arbun ildamu saikan, nure muke adali tebure, booha alin -i gese muhaliyaha be
姿 俊敏で麗しく 酒 水のように注ぎ 酒の肴山のごとく積み上げたを
gisurehe seme wajirakū,, 第 32 回 11a5-7
語ったと言って尽きない

◎jon(d)ombi 《繰り返し言及する》

(41) li-ping-el, **pan-gin-liyan -i** jorime tooha be inu **jonorakū**,, 第 41 回 20a2-3

李 瓶児は 潘 金蓮が(属)示して悪口を言ったことをまた何度も口にしない

4. 属格主語の機能の展開

久保(1981: 47)が述べるように、属格名詞は例(42)のような動名詞の意味上の主語にもなる。

(42) mini **deo -i** henduhengge, aisin gu -i gese gisun sehe,, 第 2 回 17b5-6

我が弟が(属) 話したこと 金 玉 のごとき言葉と言った

副詞節として機能する連体構造には、久保(1981: 47)があげる、adali 《～のように》が後続する例のほかに、以下に述べるさまざまな用例がある。

(43) pan-gin-liyan kemuni marama ilirakū,, **meng-ioi-leo, ioi-siyoo -i** sasari ušame

潘 金 蓮 なおも 拒んで立ち上がらず 孟 玉 楼 玉 簫は(属)共に引きずり
ilibufi juleri benehe, amba-hehe-nakcu, u-yuwei-niyang be tafulame nakabufi
起こして表へ 連れた 大 奥 舅舅 呉 月 娘 を 諫めて 止めて
hendume, 第 75 回 39b4-6
述べる

上記の例では属格ではなく主格主語でも成立可能のように思われる。すなわち「孟 玉楼と玉簫は、共に潘金蓮を引きずり起こして表に連れて行った」という意味の単文である。

理由を表す語句の **jalin** 《～ので》や **jakade** 《～のために》が作る副詞節では、属格主語の後に続く述部に発話の焦点が置かれると考える。下の例(44)では「平安をぶった」こと、例(45)では「書簡を書いて送ること」がそれぞれ理由として発話の焦点であるとする。

- (44) suweni juwe nofi aiseme injecembi,, pan-gin-liyan hendume, bi esi **ejen -i**
 あんたたちふたり なんて 笑う 潘 金 蓮 言う 私は勿論旦那様が(属)
 ping-an be tantaha¹² jalin injeh,, 第 35 回 20a1-2
 平 安を ぶった ので笑った
- (45) si-men-king hendume, ainu ciyanliyang jafaburakū,, lai-boo inu yūn-wang ni alban
 西 門 慶 述べる なぜ 錢糧 奉じない 来 保 も 鄆 王 の 賦
 de gebu bi,, biyadari damu ilan jiha menggun jafambi kai, han;-doo-guwe hendume, boo-
 に 名 ある 毎月 だけ 三 錢 銀 上納するぞ 韓 道 国 述べる 保
 guwan be **taiši -i** tubci bithe arafi getukeleme unggire jakade,
 さま (のこと) を太師様が(属)あちらより書 書いて詳らかにして 送る ので
 gelhun akū necirakū dabala, 第 67 回 7b2-6
 敢えて 手出しをしない だけ

例(44)は笑った理由を問われたことに対する返答なので、その理由部分に発話の焦点があることは明白である。例(45)も理由を問われて返答するやり取りの中で、主語を属格でマークすることで根拠であることを際立たせることができると考える。

このように理由を明示する語句を持つ節は発話の意図を言及する部分となるが、属格主語を持つこと自体が理由を表すことができると考える。

- (46) gūnici muse umai dabali yabuhakū, hūi gisurekini, **looye -i**
 思えば我々決して度を過ぎて行っていない勝手に言わせておけばよい旦那が(属)
 tubade ini cisui emu etuken -i saha babi sefi, 第 49 回 1b6-8
 あちらで自ずとひとつはつきりと考えた所がある (から) と言って

この例では、「勝手に言わせておけばよい」と述べる判断は「上役がよろしく対処してくれる」ことを根拠としている。

時間的前後を表す文にも属格主語が現れる。

- (47) tereci si-men-king, **ing-be-jiyo -i** genehe amala, gala de duin aisin -i semken
 それから西 門 慶は 応 伯 爵が(属)行った 後 手で四つ 金 の 腕輪
 be jafafi dolo ambula buyeme angga de gisurerakū bicibe dolori gūnime, 第 43 回 4b5-7
 を 取り内心すっかり可愛がり口 に出さずにいながら心中 考えて
- (48) u-yuwei-niyang hendume, si esei **ejen -i** cimaha inenggi gise hehe -i falan de
 呉 月 娘 述べるあんたはこれらの旦那が(属)明 日 廓 に
 genehe amala, si cendeme terebe baihaname tuwa,, 第 46 回 21b6-8
 行った 後 あんたが試みにその方を探しに行ってごらんない

¹² tandaha に見えるが、意味から tantaha と考える。

主節に対して、統語的にその部分として位置づけられ意味的には従属する節で属格主語が用いられることから分かるように、理由や時間的前後を表す節に属格主語が用いられるのは、属格には意味的に主となる部分に従属することを表すという特徴があるため、ある行為に従属するその理由や主要な部分に時間的に先立つことを表す構文に現れるものと考ええる。

主節主語の後の名詞に属格助詞を付けることで、従属節主語の構文であることが明示的になる。

(49) miyoo-cing neneme **ejen -i** tantaha¹³ de ambula korsofi, kemuni karulaki

苗 青は 先に主人が(属)叩いたとき 大変 恨んで 常に仕返しをしよう

seci umai ildun bahakū bihe, angga de gisurerakū bicibe, 第 47 回 4b8-5a1

と言いながら便宜 得ず いた 口 で言わないけれども

(50) cang-el-ge booi **ejen¹⁴ -i** šorgirede hamirakū dade aša geli inenggidari jabcame

常 二君は家の 主 が(属)催促するのに耐えらずかつ又 嫂また 毎日 咎めて

gasame ofi, 第 56 回 6b4-5

恨むので

主語を属格にすることで、意味的に主述構造が密になるため簡潔な表現になると考える。さらに、短文形式の韻文や諺などは、本来簡潔な表現を特徴とする文体を持つが、属格主語を持つ主述構造とすることで、述部の部分が意図を述べる部分となる。

(51) yala niyengniyeri hacihiyara de toro ilha -i fulgiyan niyaman fusejehe, **edun -i** gidašara

誠に 春 急がして 桃花の 紅 樹心 綻んだ 風は(属)欺いて

de fodoho moo -i niowanggiyan dara midaljaha,, 第 59 回 14a5-8

楊 柳 の 緑 腰 うねった

詩文の文句で、原漢文は「春點桃花紅綻蕊 風欺楊柳綠翻腰」である。対句になっていて前句の主語の“niyengniyeri”が無標形であるのに対して、後句の“edun”が属格主語になっているのは、前句との差別化・対比のために後から述べる方を有標化する修辭的工夫と考える。

以下は niyalma 《人》を属格主語とする例である。最初の例以外は banjire de 《生まれて》に先行するものであり、人の性について述べる諺や格言、經典、樂曲、詩文という形式である。動詞の未完了形に助詞 de がつく形式に属格主語が先行する点は、上記の例(50)(51)と同じである。

(52a) dekdni gisun, cooha jici jiyanggiyūn be okdobumbi(sic),, muke jici boihon -i

諺 兵 来れば 將軍 を 迎える 水来れば 土 で

¹³ 注 12 と同じ。

¹⁴ 意味からこの語と考える。

dalimbi sehebi,, baita emgeri uttu oho be dahame, **niyalma -i** faššara de
覆う と言う 事 一度こうなった 以上は 人 が(属)事を尽くすに
bikai,, 第 48 回 24b3-5
あるぞ

(52b) julgei niyalmai henduhe emu udu gisun yala absi sain,, **niyalma -i** banjire de
古 人の 言った 一 幾つ 語果たしてどれほど良い 人 は(属)生まれて
sain be labdukan isabu, ulin be ume labdu isabure,, 第 79 回 42b2-5
善 をいささか多く集めよ 財 を決して多く集めるべからず

例(52a)の原漢文は「常言 兵來將擋 水來土掩 事到其間 道在人爲」で、諺に後続する発話で同様に簡潔な主張となっていると考える。例(52b)の原漢文は「爲人多積善」で、例文の冒頭にあるように、古人の格言を述べている。

(52c) looye si sarkū, meni fucihi ging de henduhengge, **niyalmai** banjire de,
老爺あなたは知らない我らの仏 経 で 語ること 人が(属)生まれて
ye-ca, lo-ca sere hutu, kemuni niyalma be jetere de amuran, 第 53 回 15a2-4
夜叉 羅刹と言う鬼 常に 人 を食らうに 好む

これは経典の文句で、原漢文は「人中生有夜叉羅刹」である。

(52d) bi tede hendure suwe pu-tiyan-lo sere mudan -i dorgi **niyalmai** banjirede,
私が彼に述べようあなた方は普 天 楽という 曲 の 内 人が(属)生まれて
umesi gosihon ningge fakcara delhere teile sere ucun be ejehebio,, 第 31 回 25b9-26a2
大層 苦しい もの 分 岐するだけと言う 歌 を記憶していたか

(52e) gūnici **niyalma -i** banjire de delhere fakcarangge umesi gosihon, 第 65 回 36b5-6
思うに 人は(属)生まれて分かれて離散すること大変 苦しい

これらは「普天楽」という楽曲の文句「想人生最苦（是）離別」である。

(52f) ši -i gisun be temgetu obuhabi,, **niyalmai** banjire de doigonde same muterakū
詩の言葉 を 印 なした 人が(属)生まれてあらかじめ知ることができない
bicibe, jobolon hūhuri -i da turgun be we de fonjimbi,, 第 87 回 9b6-8
ならば 苦 福 の元の理由 を 誰 に 尋ねる

(52g) ši bithei gisun be temgetu obuci ombi **niyalma -i** banjire de sese noho
詩 書の 句 を 印 なすことができる 人 が(属)生まれたときに織金朝衣
etuku be ume hairandara, **niyalma -i** banjire de asihan -i erin be
衣服 を惜しんではならない人が(属)生まれたときに若者の 時 を
ume urgedere, 第 93 回 23b9-24a2
逃してはならない

例(52f) の原漢文は「人生雖未有前知」で、例(52g)は「人生莫惜金縷衣 人生莫負少年時」で、共に詩文の語句である。

これらはいずれも簡潔な形式を特徴とする文体と思われるが、他方で同じ意味の語句になる、属格主語ではない詩文の例もある。

(53a) **niyalma** banjire de nure bici uthai soktome omi, 第 66 回 17b2

人(主) 生まれて 酒あればすなわち酔わんと飲め

(53b) ts bithei gisun, **niyalma** banjire de julergi amargi be, salja jugūn -I gese,, 第 79 回 1a4-5

詞書の 言葉 人(主)生まれて 南 北 を 分岐 路 の 如し

(53c) **niyalma** banjirede gūnin be ufararangge daci julge te ilgabuha ba akū,, 第 89 回 1b8-9

人(主) 生まれて 意 を 失うこと 元 昔 今区別した所なし

それぞれの原漢文は、「人生有酒須當醉」「詞曰 人生南北如歧路」「人生失意 從來無問今古」で、地の文ではなく挿入された詩文である。詩文の翻訳で主格形にするか属格形にするかは訳者の任意であると考ええる。

(54) julgei urse pan-gin-liyan -i bucehengge asuru gosihon be irgebume araha emu fiyelen -i

昔の人々 潘 金 蓮 の死んだこと大層憐れんだのを詩にして作った一 編 の

ši bi, terei gisun,, nasacukangge pan-gin-liyan yargiyan -i jilakan, etuku adu be kokolime

詩あるその言葉 哀れなこと 潘 金 蓮 誠 に哀れな 衣服 を 剥ぎ

sufi oren -i juleri niyakūrabuha,, **u-el -i** loho jafafi wara be ainahai

取って霊 の 前に 跪かせた 武二が(属)剣 執って殺さんとするをいかに

saha, 第 87 回 20b6-21a1

知ったか

原漢文は「誰知武二持刀殺」で、上記の例(31)(32)と同じく主節述語に saha(<sambi 《知る》)を持ち、詩の一節として属格主語を取るものである。

以下は、比喩を表す語 **adali**, **gese** を含む表現に用いられる副詞節である。

(55) juwe gise hehe -i gala be jafafi zuwan-joo, **lio-cen -i** tašarame tiyan-tai alin de

ふたりの芸 妓 の 手 を取って恍惚として劉 阮が(属)誤って 天 台 山 に

dosika adali fei-ts'ui-siyūn de dosika,, 第 49 回 16a8-9

入ったように翡 翠 軒 に 入った

(56) ganionga **edun -i** giranggi de nikenjihe gese šahūrambi,, 第 9 回 10a8

奇異な物 風が(属) 骨 にしみこんだように 冷える

属格主語が比較を表す副詞節にも用いられる。

- (57) sini nenehe niyangdz, te -i ere niyangdz seme, inu ere **da-niyangdz -i** faksi
 あなたの先の 奥様 今のこの奥様と言えど もこの大 奥様が(属)上手
 hocikon de isirakū, 第3回 21b4-6
 美しい に及ばない
- (58) ere be gamafi nainai se de uculeme donjibu,, ai geli **ioi-da-jiyei -i** uculere
 この方を連れて奥様 方に 歌って聞かせて何また 郁大 姐が(属)歌う
 ci yargiyan -i wesihun,, 第61回 7a7-8
 より 真 に 上だ

また、医術の口上の例がある。専門用語の羅列は文体上で特徴的なものとする。

- (59) nadan tuku jakūn doko be jafafi, **me -i** dekdere irure¹⁵ be toktobumbi, 第61回 36a2-3
 七 表 八 裏 を 弁え 脈が(属) 浮き 沈む を平らかにする

5. おわりに

本研究は、久保(1981)を嚆矢とする従属節斜格主語の研究において、特に属格主語の機能に対し、山崎(2015)で提起した、それ自体が焦点となるという対格主語の機能¹⁶と比較することで、より詳細に考察した。

本稿で扱った、三種類の従属節主語の特徴とそれが見られる例を表にまとめると、次のようになる。

本稿の主張は、以下の通りである。

- 1) 満洲語文語の従属節主語の三タイプのそれぞれの機能的な特徴に関して、属格主語はその後の従属節述部に発信者が最も強調する情報である「焦点」が置かれる有標情報を示し、対格主語はそれ自体が焦点の有標情報となり、主格主語はどこにも焦点を置かない、当該文脈において無標の情報となること。
- 2) この主張を裏付けるために、有標の情報の場合には用例の前後の文脈に、その用例に関わることへ言及した箇所があることを検証したこと。
- 3) 従属節に属格主語を持つ文の主格述語動詞には、主節主語の動作主が従属節の伝える内容にどのように接するかに基づく、受信型知覚動詞及び心理・思考動詞と発信型発話動詞の三種類があること。
- 4) 従属節属格主語は、理由や比喻などの副詞節のほか、諺や格言、経典、楽曲、詩文などの簡潔な文体的特徴を持つ表現にも用いられること。

¹⁵ irore に見えるが、意味から irure と考える。

¹⁶ 山崎(2015)では、従属節対格主語の機能を「主題」の提示としたが、本稿での言い方では「焦点」とすべきである。

主格

機能			用例番号
焦点にならない			5a, 6a

属格

機能	主節述語の動詞による分類	構文的特徴	用例番号
従属節述部に焦点をあてる			1, 2, 3, 4, 5b, 6b, 7, 11, 15, 16, 17
	受信型知覚動詞		18～24
	心理・思考動詞		25～34
	発信型発話動詞		35～41
		先行動作	43
		理由	44, 45, 46
		時間的前後	47, 48
		対句	51
		諺、格言、経典、楽曲、詩文	52a～g, 54
		比喻	55, 56
		比較	57, 58
		医術の口上	59

対格

機能			用例番号
それ自身が焦点になる			5c, 6c, 8, 13, 14, 15, 16

本稿では、当該現象に関して機能と構造の両面からの分析を、『満文金瓶梅』の例を主とし『擇繡聊齋志異』から例を加えて行った。この言語の三種類の従属節主語の機能に関する仮説を提起したことは本稿が初めてであり、それを多くの用例により検証しえたと考ええる。こうした、属格主語が典型的な埋め込み文形式以外のさまざまな節や文体で用いられることは、これまで本稿以外の専論をもって論じられたことはないと考ええる。

このように満洲語文語の当該形式が持つ、従属節での焦点の導入と副詞節などでの機能が明らかになったことを基にして、筆者は本稿冒頭で触れたモンゴル語に加えて他のアルタイ諸語だけでなく、日本語や朝鮮語などにおける類似した構文と比較して、それぞれの言語がどのような機能を有するかを考察して行きたいと考えている。

略号

(主)：主格、(属)：属格、(対)：対格

参考文献

- 包麗娜(2014)「日本語とモンゴル語の助詞に関する比較統語論研究」大阪大学博士論文
- Gorelova, Liliya, M. (2002) *Manchu Grammar*, Leiden: Brill.
- 早田清冷(2013)「満洲語の属格：同格および連体節主語を表す場合」『水門 言葉と歴史』25: 172-178.
- (2015)「古典満洲語の「同格の属格」について」『言語研究』147: 7-30.
- 早田輝洋(2011)「満洲語における対格主語」『九州大学言語学論集』32: 203-214.
- 久保智之(1981)「満洲語文語の従属文の主語がとる助詞 i および be について」『九大言語学研究室報告』2: 46-50.
- 山崎雅人(2015)「アルタイ諸語、朝鮮語、日本語の従属節対格主語の機能について」『日本言語学会 第 150 回大会予稿集』50-55.

資料

- CHIN P'ING MEI, 1975, San Francisco: Chinese Materials Center Inc.
- LIAO CHAI CHIH I, 1975, San Francisco: Chinese Materials Center Inc.
- 《新刻繡像批評 金瓶梅》曾校本、1990 年、三聯書店有限公司、香港
- 小野忍・千田九一訳 1980 年『金瓶梅』東京：平凡社
- 早田輝洋訳註 1998 年『満文金瓶梅訳注 序一第十回』東京：第一書房
- 増田渉・松枝茂夫・常石茂訳 1980 年『聊齋志異』東京：平凡社

The Function of the Genitive Subject in Subordinate Clause of Written Manchu

Masato YAMAZAKI
(Osaka City University)

Subordinate subjects in Written Manchu can be in nominative, accusative or genitive forms. Genitive subjects have the function not only of introducing information in focus in the subordinate clauses but also of implying stylistic features seen in verse.

○*si-men-king*(nom.) *boode jihe seme donjire jakade*, “They heard Si-men King came home, and then”. There is no mention about the event, i.e. the return home of Si-men King, in context around this utterance, and the author thinks that this is an example of unmarked information.

○*si-men-king be*(acc.) *jihe seme donjifi*, “They heard Si-men King came, and”.

In context before this utterance, there is another utterance related to the event, i.e. Si-men King's visit; *ineku mini sakda beye geneŋi hontoŋo erin ohakū da-guwan-zin be gajihā kai* "I brought this gentleman here in less than half an hour after I had gone out!" Thus the author thinks that Si-men King with an accusative suffix becomes the focus as an agent in the utterance.

○*si-men-king ni*(gen.) *jihe be donjifi*, "They heard Si-men King came, and".

In context after this utterance there is another utterance related to the event, i.e. Si-men King's return; *sini uttu erde jidere be sarkū* "I did not know you could return home that early." Thus the author thinks that an action told following Si-men King with a genitive suffix is the focus in the utterance.

Propositions in subordinate clauses are classified into three categories; subjects in a genitive form work as a forerunner of the focus in an utterance, and subjects in an accusative form function as the focus itself, while nominative subjects imply neutral meaning. Among these three types, the genitive subject is the most multi-functional. For example, it is used in the verse: *niyalma -i*(gen.) *banjire de sain be labdukan isabu* "Do right when one is born." 爲人多積善.

(やまざき・まさと yamazaki@lit.osaka-cu.ac.jp)